

ゲエテ、シラーと有島武郎

エマヌエル・ノイバウアー

「土香るラジオ文芸館」から一部抜粋してお届けします。今回はエマヌエル・ノイバウアーさんです（2019年4・5月放送）

—はい、今月の「この人に聞く」は、この方です。

Em みなさん、こんにちは。ニセコ町の国際交流員、エマヌエル・ノイバウアーです。

—簡単に、自己紹介をお願いできますか。

Em ドイツのベルリン出身です。JRニセコ駅の中にある観光協会のスタッフとして働いています。

—日本語が達者ですけど、どこで学んだのですか？

Em 中学から高校まで日本語の授業がある学校にいたので、日本語を選択して学んでいました。

高校を卒業後は兵役が待っているのですが、福祉ボランティア活動などをすれば兵役を免れることができるので、日本の老人ホームなどでボランティアしながら日本語勉強しました。そのためには、書類や論文などたくさん書くことを書かなくてはいけなくて大変だったけど、勉強にはなりましたね。

—そんな若い時から日本語に関心があったのは、どうして？

Em 子供の頃から日本の漫画やアニメにとっても関心があったんです。だから、中学生の時も高校生の時も、研修旅行で日本に来ましたよ。その時は、東京や京都だったけど。それほどぼくは日本のアニメに魅力を感じたんです。今でも大好きです。—そんなアニメ大好き少年だったエマヌエルさんは、ニセコに来て有島武郎と出会う前にも、有島武郎のことは学んで知っていたんですか？

Em 有島武郎のことは、大学で

日本文学を学んだ時、勉強したのかもしれないけど、全然覚えていなかったですね（笑）。国際交流員としてニセコに来て有島のことを聞いた時も、初耳でした。有島記念館に行つて展示を見ても思い出せなくて、ただ、記念館の展示がとても芸術的に見ているだけで楽しくなりましたね。

—記念館では、初めは何が印象的でしたか？

Em 有島武郎が描いた絵を見て、びっくりしました。展示では「小説家」と紹介されているのに、作家がこんな素敵な絵を描くんだ、って、とても魅力を感じました。

—確かに彼の絵は素敵ですよ。—そういえば、文豪ゲエテも絵を描いた人じゃなかったかな？

Em そうです、そうです。ゲエテも絵を描いた人です。有島武郎と共通項が見つかりましたね（笑）。

—いいところで、有島武郎とゲ

エエテが結びつきましたね（笑）エマヌエルさんがせっかくなので、武郎がゲエテをどんなふうを意識していたのか、少し話題にしましょうか。先に私の方から、武郎がアメリカ留学から帰国する途中でヨーロッパ旅行した時のことを少し話しますね。

アメリカから帰国の途中で、武郎はイタリアで弟の生馬と合流して、イタリアからスイス、ドイツ、オランダ、フランス、イギリスと回りますが、ドイツで彼らは都市を十箇所巡りました。その中でもっとも長期間滞在したこだわりの都市は、エマヌエルさんの出身地ベルリンではなくて（笑）、ワイマールだったんです。さて、それはどうしてか？

Em あ、わかりました！ゲエテとシラーですね。

—ピンポン（笑）ゲエテもシラーも、日本でも超有名ですが、お国の皆さんは作品をしつかり読むんですか？

Em それぞれ一冊以上必ず読まなくてはいけないですよ、学校では。

ーじゃあ、エマヌエルさんも？

Em ゲーテは「若きウエルテルの悩み」を読みました。シラーは「えーと・忘れました(笑)

ーシラーは、日本では詩人のイメージが強いですよ。ベートーベンの「歓喜の歌」とか。

Em 戯曲も多いですね。私が読んだのも、題名忘れましたが、悲劇の戯曲でした。

ーゲーテとシラーがワイマールに關係していることを武郎は知っていて、それでワイマールに強い愛着を感じたようなのですが、ゲーテとシラーはワイマールとどんな關係だったのですか？

Em ワイマールは最初文化的な都市ではなかったのですが、王様は芸術の都市にしたくて、ゲーテを招いたんです。当時すでに有名だったゲーテは、ワイマールで芸術だけでなく政治にも関わ

れるという条件に惹かれて申し出を受けました。ゲーテは、ワイマールの憲法をつくりました。

これは、のちに第一次世界大戦後有名になったワイマール憲法とは別のものです。当時ベルリンは戦争にかかわる歴史が長く文化的ではなかったのに比べると、ワイマールはゲーテの働きで、憲法、文学、文化のまち

となりました。一方シラーも、

有名になってからゲーテとお互いの才能を認め合う信頼関係ができて、ゲーテがシラーをワイマールに招きました。二人は、とても仲が良かったといいますが二人がワイマールで文学に携わっていた頃の時代を、「ワイマール・クラシック」と言います。ドイツを代表する二人の作家がワイマールにいたので、そう言ったんですね。

ーなるほど、それで、二人の墓がワイマールにあるんですね。

Em そうです。二人の墓、といえば、こんな面白いエピソード

がありますよ。

シラーはゲーテより若いのですが、病気のためゲーテよりずっと若くして死んだのです。シラーは、亡くなった時いろんな人と合葬されました。ゲーテはそれを悲しみ、自分が死んだらシラーの側に埋葬してほしい、と

希望しました。それで、合葬されたたくさんの方々の骨の中からシラーのものと思しきものを探して、有名人用の特別の墓に移したんです。ゲーテが亡くなって、遺言どおりシラーの墓の側にゲーテも埋葬されたのですが、2000年以降になってこのことに疑問を感じた学者がシラーの骨とされたものをDNA鑑定したところ、全然違ったバラバラの骨の寄せ集めだったそうです。結局それらを全て元に戻した結果、シラーの墓は空っぽになりました。ただ、棺だけは、ゲーテのものと同じもののが仲良く並んでいるといえます。ーそのお墓や棺の様子は、エマ

ヌエルさんは見たことがあるんですか？

Em いや、まだワイマールに行ったことがないですよ。

ーじゃあ、ゲーテは、今でもお墓の中で隣には仲良しだったシラーがいるものだと思うているんでしょうね。

Em そうでしょうね。かわいそうですね、ゲーテもシラーも。

ー武郎は、そんなことが判明する前の時代にワイマールを訪れているので、二人の遺骨が並んでお墓の中に眠っていると思うて、いろいろと偲んだでしょうね。さっき、エマヌエルさんはワイマールに行ったことがなかったと言ってたから、じゃあ、武郎と生馬が、ワイマールでどんなところを訪れたか、具体的にはイメージできないかな？

Em できないですね。でも、ワイマールに観光で行く人はたいがいゲーテとシラーの旧跡を訪れますから、大体決まっているようですよ。

—そのようですね。武郎の日記を見ると、生馬と二人でゲーテとシラーゆかりの史跡をきめ細かく訪問しています。たとえば、国立ゲーテ博物館、その隣のゲーテの家、シラー最期の家、ゲーテとシラーのお墓、でもこの

お墓ではお詣りまではしてはいないようです。単に立ち寄っただけなのかな？それから、二人の資料保管庫、王宮、あ、この王宮の中には、ゲーテの部屋、シラーの部屋、ヘンデルの部屋などがあるようですね。そして、図書館、フランス・リストの家。

ヘンデルやリストといった音楽家もワイマールに関係していたんですね。それにしても、武郎は二人で随分たくさん場所に行ってます。六日間滞在したというのも、頷けます。まるで、観光旅行だよ（笑）

Em 私も行ってみたいです（笑）—ところで、武郎は日本にいた時もアメリカ留学中も、ゲーテもかなり読んだようですけど、

それ以上にシラーの作品に心惹かれたように日記には書いていません。私たち多くの日本人には、シラーという人はゲーテほどにはピンとこないのだけど、エマヌエルさん、シラーってどんな人だったのですか？

Em シラーは、親に言われて最初は医学の道に進み、軍医として働いていたんです。でも、もともと文学への思いが強かったので、軍医としての仕事の傍、読むだけでなく自分でも文学を書くようになりました。たとえば読むことが禁じられていた種類の文学作品を読むなど、反骨精神も豊かだったようです。読むことが禁じられていた文学というものは、当時周辺国で書かれていた革命をめぐる物語などです。そんなシラーが、本名を隠してペンネームで書いた戯曲『盗賊』が、多くの人に読まれて人気になって、評判になりました。気を良くしたシラーは友人に、作者は自分であることを

うっかり話したことから、軍医だった自分の立場の上司から厳しく叱られ、文学を書くことを禁じられました。文学を書くということが禁じられただけでなく、その『盗賊』という戯曲は、自由を志す反王政的な「盗賊」の物語だったので、しかも、

その場所がスイスのある都市だったので、その王様が侮辱されたと訴えたことから、シラーの立場はますます悪くなりました。シラーは、文学を一切諦めるか否かとても悩んだ末に、文学を諦められずに、軍医の職場から逃走したのです。

このことは、結果的にシラーの才能を世に広めるプロモーションの効果を生んで、彼の名が世に広まっていきました。

ゲーテも、当然この『盗賊』によって、シラーを知ったのだと思います。おもしろいことに、ゲーテは、シラーのことを知った最初の頃は、自分の名声が脅かされるのではないかと、嫉妬

したのではないかと言われています。でも、ゲーテがシラーの才能を知るにつれ、ゲーテを慕うシラーの心を受け入れるようになり、お互いの才能を認め合う親友となりました。そのような関係になって、ゲーテはシラーをワイマールに招いたので、

—なるほど、シラーの人生もすごいですね。そして、そんなシラーとゲーテの信頼関係は、類をみないほど深いものがあつたんですね。武郎が、アメリカの大学でシラーを熱心に読み心惹かれたというのも、何となく理解できます。シラーの反骨精神とか、文学にかける情熱とか、武郎自身にとっても、何か心に深く感じるものがあつたのかもしれないですね。

エマヌエルさん、とても楽しいお話、ありがとうございます。
Em こちらこそ楽しかったです。ありがとうございます。

（※トークの一部を掲載しました）